

の保育園は劣悪な環境、設備の時代を経過するも入所希望の乳幼児は増加するばかりでした。昭和四十四年（1969年）に財団法人若葉会が設立されたのを機に、それまでの木造園舎を取り壊して現在の鉄筋鉄骨造りの園舎が建てられました。保育園の設置主体が財団法人ですから、園舎建て替え費用は、補助金等の支援は一切無く、正に法人自立の保育所として児童福祉施設一筋に事業が継続されたことが今日に至る創立以来、第二期目の画期的ステップアップではなかったかと回顧します。

財団法人設立時（昭和四十四年）の児童定員は150名で、平成二十五年（2013年）までの四十有余年もの間、毎年度とも定員を十五パーセントほど上回る児童数で推移してきました。七十数年に及ぶ保育事業実績が評価されてきた賜りで、定員数を越えて乳幼児の保育受容が実施できたのかと誇りに感じています。

昨夏、日本は戦後七十年となり、政治的社会的にも大きな転機を迎えた感は否めません。若葉保育園の八十年の歴史は、戦前から今日に至る長大な歩みでもありました。

ところで、平成二十五年になって、

予想だにできなかった事態に直面しました。四十四年間に亙る財団法人を解散して社会福祉法人組織に変更するよう

にと埼玉県所轄部局からの建つての指導によるものでした。この組織変更化への指導説明には些かも理解納得し難いものでしたが、全国的にも希有な財団法人設置主体の保育園であることから、組織の変更を余儀なくされました。早速に法人役員会にも諮り協議しましたところ、向後の若葉保育園の存続と運営には、不本意ながら承服するしか方途は無いとの結論に達し、平成二十五年十月十日に現行の設置主体・社会福祉法人財団若葉会が設立され発足しました。同年十月末を以て旧来の財団法人若葉会は解散しました。保育園が設立してからの経過を辿りますと、大きな節目の第三期事業が新法人設立の時期であります。それは夙に、保育所制度の激変に機が重なります。国は、厚生労働省主導の従来の保育所直轄はそのままとし、内閣府が新たに子ども子育て新制度を施行しました。時を同じくして、一気に保育所の設置基準が厳しくなり、本園は基準のハードルが高くなったことから、入所希望者その例年に変わらぬ人数の多さに反して、行田市が入所審査して保育受け入れを

承諾した児童数は、平成二十六年度から十パーセント相当の定員減の園児数に落ち込む結果に至りました。因に、二十五年度は168人、二十六年度は146人、二十七年度は138人と減少しました。定員減の要因は、保育所設置基準を厳しく適用したことと唯一園舎の保育面積が年齢児保育室によつては基準を満たさないという事由であります。長年に亙つて定員を遥かに上回る児童の受け入れを容認しながら、新制度施行に合わせて今更、基準を厳しく適用する事情の急変に無念の感は

否めません。折角、本園への入所を希望しても、斯かる基準に関わること及び入所審査が複雑にして厳しく改定されたことに、ある種の不条理を覚えま

した。昔と違って、学校も保育園も私たちの社会が求める条件が安全、快適、便利そして安心な社会環境という平和で恵まれた時代は、貧しくても大人たちが一生懸命に働いて汗をかいて生き抜いてきた往時、飲食物に飢えながらも子どもたちは元気いっぱい山野を駆け回つて遊んだ昔日が園舎に刻まれています。

日本は久しく少子高齢化社会が進み今や人口の八十パーセントが六十五歳

所属保育園の設立に至るルーツを探る

昭和五十七年（1982年）発行
「埼玉県保育史」より抜粋

○若葉保育園（昭和十一年）発足

埼玉県保育協議会によって昭和五十七年三月に発行された「埼玉県保育史」によると若葉保育園は昭和十一年一月、忍町（現行田市）に設立。設立者は保泉近蔵さん。以下は元園長で近蔵さんの長女故保泉静子さんが、生前、昭和五十四年八月に、埼玉県保育協議会保育史編纂委員会にあてて書いた設立当時の事情である。「忍町は昔から足袋生産地として知られ、各家庭はどこでも内職が盛んで、夜業も二時三時頃まで続いた。にぶい電灯がミシン台近くにたれさがり、ミシンの音がかまびすしく聞こえていた。当時は軍国主義の時代でもあり、各家庭には五く六人の子どもがいて、主婦たちは家事とともに子育ての仕事に全く落ち着かぬ様相であった。

ある日、四く五名の主婦が子どもを背負い、両手にも引いて、疲れ果てた表情で来宅し、子どもを預かってくれる施設の設立を依頼した。父は早速、時の町長高城さんに相談したが、町の

財政は思うようではなく、時期を待つことになった。しかし、主婦たちの状況を思い、一日も早い実現を願っていたが、偶然、町の中心部にある土地の売却を知り、所有者との相談も成立し、その土地を求めることができた。その後、今度は知人からの話があり、羽生在川俣村に養蚕所の空き家があることを知りそれを見にでかけた。屋根の低い二階建てではあったが、面積は広く、柱も角材のしつかりとしたものであったので、これならば二十く三十名の児童の収容はできるものと、持ち主に譲ってくれるよう頼んだ。急遽解体し、求めておいた土地に建設を終えたのが昭和十一年の春のことであった。

園舎がどうにか完成すると、知人からの話があつて、当町（忍町）に在住していた富田わかさんに最初の保母になつていただいた。先生は年輩者であったが、経験もあり、他に若い保母さんも頼むことができた。また幸いなことに小使い（用務員）さんも決まり、早急の実現に大喜びであった。内部設備や備品も富田先生の口添えでほぼ揃つて開園の運びとなると、主婦たちよ

りつぎつぎと子どもを委託された。約三十名の子どもの入園となり、昭和十一年一月二十三日、町長をはじめ、

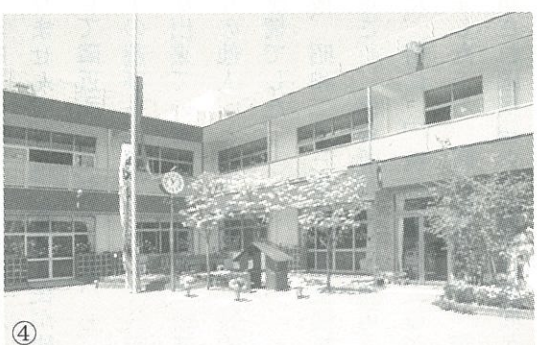
町の有志五十名程をお招きし開所式を行った。子どもたちの将来を思い、若葉のようにすくすくと育つようにと、「若葉」と命名した。昭和十二年三月には第一回の卒園式を迎えて、昭和六く七年生れの十八人ほどの児童が卒園した。形ばかりの証書と記念品であったが、父兄の喜びはなによりであったようだ。

昭和十二年四月、残つた児童と新入園児で五十名くらいになった。備品や食器、楽器なども大分購入した。昼食は二、三のお弁当屋さんに交代で頼み、おにぎり、さつまいも、菓子パンなどで補った。昭和十二年は日中戦争が勃発した年で、食糧も不足がちになつたので、私たちは日曜日を利用して、農村に買い出しに出かけた。昭和十五年になると戦争はますます拡大し、主人は出征し、私たちは老園長にかわつて仕事をすることになった。当時、県内初の私立保育園の設立者である豊岡保育園の繁田くら先生、また、熊谷の愛隣保育園の由木とめ先生とは時々会合を開き、施設運営などについて話し合つた。戦後の昭和二十三年六月埼玉県認可により児童福祉施設としての保育所となり、定員は百五十名となつたと語られている。

以上の高齢福祉社会にありながら、家庭内暴力、虐待、いじめ、不登校児童生徒など、曾て稀な事案が社会問題化して後を絶ちません。子育ても、保育所の在り方も従前とは随分様変わりしました。

今日に至る若葉保育園の Legacy を、現運営主体の法人は将来へ結び繋ぐべく、やがては日本の宝となる心身健やかな幼児の育成を念じて、創立の理念に則り決意を新たに邁進します。こよなく懐旧しながら、将来に向けて若葉保育園の平穩な歩みを祈りつつ回顧を結びます。

平成二十八年春 記



④

戦時下の若葉保育園については、若葉保育園元園長、故保泉静子さんの戦時中の思い出として「戦時中空襲がさかんになって来た頃は、警報が出るたびに急いで園児を家へ送り返しました。園舎のガラスには×の字に障子紙を貼り、ガラスが破損しても怪我のないように配慮しました。統制品のまんじゅうやお菓子類が、菓子協同組合より、無償あるいは公の価格で、よく配給されました。もちろん、警察の押収したヤミ物資が組合経由で手に入ったわけです。十日に一度くらい、自転車で約二キロの道を受領に出かけました。

遠足は、今のようにバスなどを利用するわけではなく、近くの河原や松林のある所を選んで行きました。終戦直後は物資もなく、保育園の経営も大変でした。園に自転車もなく、ノーパンクの古物の自転車を千円で買い、子どもたちの送り迎えをしたりしました」と語られています。



⑥